



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

観点別学習状況の評価を活かしたカリキュラム・マネジメント：いま問われる学習評価と学校の在り方

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 至巨, 金指, 紀彦, 荒井, 一浩, 小境, 久美子, 齋藤, 洋輔, 佐藤, 亮太, 長世, 諒, 馬場, 正太郎, 福元, 康貴 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00180066

観点別学習状況の評価を活かしたカリキュラム・マネジメント

－いま問われる学習評価と学校の在り方－

Applying Criterion-Referenced Assessment to Curricular Management :
Reconsidering the Role of Assessment for Learning and School

研究部 (研究推進)

松本 至巨 金指 紀彦 荒井 一浩 小境久美子 齋藤 洋輔
佐藤 亮太 長世 諒 馬場正太郎 福元 康貴

<要旨>

観点別学習状況の評価について、育成すべき資質・能力の3つの柱に対応した学習評価を行うべく各教科で準備・検討を重ねてきたが、今年度から新学習指導要領の施行とともに実際に導入された。本校で従来から行ってきたレポート等のパフォーマンス課題について十分な評価できるようになった一方で、よりよい評価を行う上で評価規準となるルーブリックのアップデートの必要性を感じている。また、この評価の実施にともない、新しい時代に求められる資質・能力の育成に向けた教育活動に向けた検討も始めた。各教科で学んだことを基盤としてさまざまな問題を分析・解決することのできる総合的な資質・能力を身につけさせるために、探究活動を含めた各教科間のカリキュラム・マネジメントをどのように構築していくべきかが、いま学校に求められていることと考えている。

<キーワード> 観点別学習状況の評価, 資質・能力の育成, パフォーマンス課題, 指導と評価の一体化, カリキュラム・マネジメント

平成30年に告示された新しい高等学校学習指導要領(以下、新学習指導要領と表記)では、新しい時代に必要となる資質・能力の育成を踏まえた「学習評価の充実」、「教科・科目等の新設や目標・内容の見直し」、および「主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善」が示され、それらの教育活動の効果を最大化するものと

して各学校に「カリキュラム・マネジメント」の実施を求めている。これは、平成28年12月の中央教育審議会答申において、「答えのない課題」が山積するこれからの社会においては、学校と社会が連携して資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」や、各学校において学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・

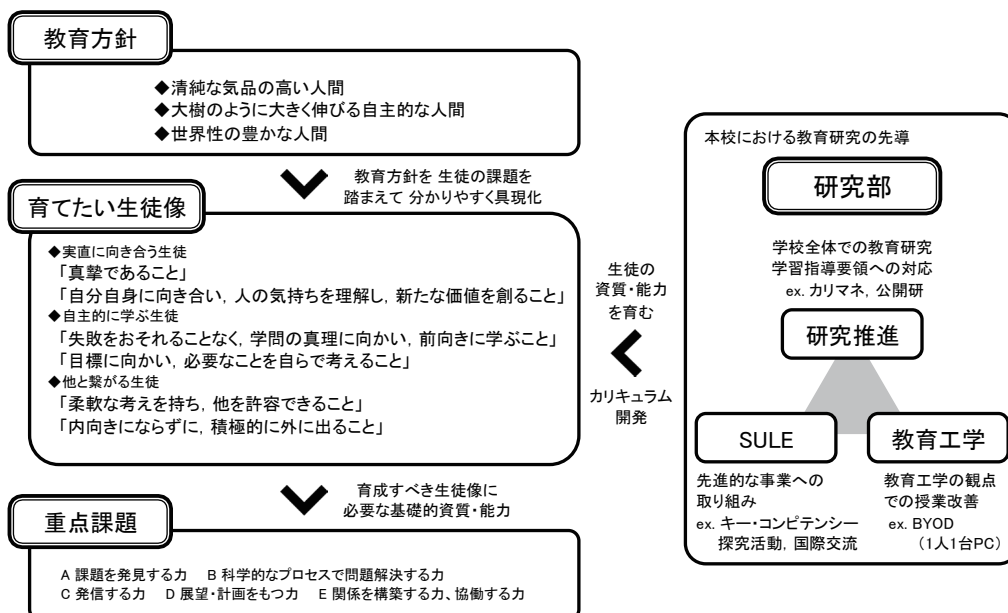


図1 本校における教育研究の方向性(ゴールイメージの整理,平成30年度作成)

マネジメント」の実現が急務とされていたことを受けたものである。

本校では、平成24年度より文部科学省指定事業スーパーサイエンスハイスクール（以下SSHと表記）に指定されて以降、コンピテンシーの育成を意識したカリキュラム開発を行ってきた。そこでは本校で育成すべき資質・能力として、「5つの重点課題」（課題を発見する力、科学的なプロセスで問題を解決する力、発信する力、展望・計画をもつ力、関係を構築する力・協働する力。図1参照）を設定し、それらの能力を高める授業・カリキュラムを構築しながら、特にパフォーマンス評価を充実させることに重点をおいた（平成28・29年度）。これを受けて平成30年度から令和元年度にかけて、「5つの重点課題」に加えて本校で育成したい生徒像を意識し、「SSH探究」をコア科目としたカリキュラム・マネジメントの作成およびそれに基づいた授業開発を実施した。

令和元年度からはコンピテンシー・ベースのカリキュラム開発にも継続して取り組んでいるが、新学習指導要領の施行が迫ったことから、同時に導入される観点別学習状況の評価について各教科で検討を重ね、育成すべき資質・能力の3つの柱に対応した学習評価に向けた準備・試行を進めた。「知識・技能の習得」については従来から行われている考査で確認するとともに、本校の特色として伝統的に行われてきたさまざまな実習のレポートなどのパフォーマンス課題を活用して評価を行うことにした。「思考力・判断力・表現力等の育成」についても考査における応用問題などの発展的な問題とパフォーマンス課題を評価対象とした。本校でも各教科で検討を重ねた「学びに向かう力・人間性等の涵養」については、パフォーマンス課題や学期ごとの振り返りを書かせた紙面などを見ることにした。評価にあたっては、考査については基本的に得点を利用することとしたが、パフォーマンス課題や振り返りシートについてはルーブリックを作成し、課題を提示する際に生徒にあらかじめ提示した上で評価を実施するようにしている。ルーブリックの評価規準については現在も各教科で模索が続いており、実際に適用しながらよりよい評価ができるよう年々アップデートしていく必要性を感じている。本校では以前からパフォーマンス課題を積極的に導入してきたものの、考査を行う教科ではどちらかというと考査の成績が評価に大きく反映されることが多かったが、「思考力・判断力・表現力」や「学びに向かう力」の評価が導入されたことで、レポート等の課題に真剣に取り組んでいる生徒に相応の評価ができるようになったことは、高等教育との接続

の面からも大いなる前進といえる。また、以上の3観点の評価を年度末に評定に直す際のそれぞれの観点の評価の比率については、各教科の特性を鑑みて教科ごとに決めることにしているが、これについても学校の指導目標などをもとに校内で議論が続いている。以上の点について、教科単位で行われる研究協議会で本校の実施状況を報告し、他校からの参加者から各校の状況について貴重な情報をいただいた。ここでの活発な議論で得られた知見をもとに、よりよい評価の実施に向けて今後さらに研究を進めていきたい。

また、観点別学習状況の評価の実施にともない、新しい時代に求められる資質・能力の育成に向けた教育活動に向けた検討も進めている。観点別学習状況の評価においては生徒の学習状況を把握するとともに、生徒の学力向上のための教員の授業改善を求めている。本校では主体的・対話的で深い学びをどのように実現するか、質の高い理解を図るための学習過程にどう改善していくかについて重点課題として取り組んできた。主体的・対話的で深い学び、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点からの学習過程の改善が求められているが、生徒はある程度の基本的知識がないと深い学びにつなげることができないと考えられる。一方で知識をただ暗記するだけでは何の役にも立たない。理解をともなって知識を習得し、それを活かして主体的・対話的で深い学びを行い、生徒が将来生きていくための資質・能力を身につけさせ、社会で活かすことができるようにすることが求められている。午後の講演会では、このような点について東京大学名誉教授で帝京大学中学校・高等学校校長補佐である市川伸一先生をお招きして、児童生徒の学習評価に関するワーキンググループにて議論された観点別学習状況の評価の趣旨を踏まえ、「指導と評価の一体化」を具現化した授業実践についてお話しいただいた。

また、急速に変化し、予測が困難な時代を生きていく生徒たちは、各教科で学んだことを基盤として、さまざまな視点から問題を分析し、統合的に問題を解決していくことができる総合的な資質・能力を身につけてもらいたいと考えている。そのために各教科間の連携を考えるカリキュラム・マネジメントは欠かせない。問題を設定し、各教科の知識を総合的に活かして問題解決に取り組む場が探究活動の学習である。探究活動を含めて、各教科間のカリキュラム・マネジメントを構築し、将来の社会で生きていくための力をどのようにつけさせるかが、いま学校に最も求められていることと考えている。このような背景も踏まえ、講演の中では「習得と探究のサイ

クル」などについても市川先生からお話をうかがった。

市川先生の講演では、習得学習の例として「教えて考えさせる授業（OKJ）」を取り上げていただき、知識・技能を教え、それが習得できているか、生徒に思考、判断、表現させながらみとるのが授業であるとする授業観についてお話しいただいた。生徒の習得、すなわち学習状況を観点毎に捉えようとするOKJの考え方は、本大会のテーマである観点別学習状況の評価と親和性が高く、講演会を通してOKJが授業改善の1つのモデルとなることを学ぶことができた。また、OKJが習得と探究のサイクルとどう繋がるのか、習得と探究の違いはどこにあるのかもうかがうことができ、習得と探究の2つのサイクルが連動したカリキュラム・マネジメントを行っていく必要があるということを再認識することができた。

公開研 公開授業

国語(現代文B)「評論單元における『主体的に学習に取り組む態度』評価の試み」

授業者 日渡 正行

1. 研究主題との関わり

言語活用能力はあらゆる学習の場面で必要なものであり、生徒がその能力を主体的に身につけていくことを願っている。生徒の学習の実態と観点別評価を結びつけることで、生徒の主体的に学習に取り組む態度を良い方向に導いていきたい。ただし、今回の公開授業の科目は「現代文B」であり、新しい科目である「論理国語」「文学国語」ではない。そのため、生徒に示すかたちでの観点別評価は実施していないが、課題の評価の方向性を示すことで、「主体的に学習に取り組む態度」の評価につながる授業・課題を提案する。新しい学習指導要領が示され科目も一新していくとはいえ、従来の授業のあり方からかけ離れたものになったわけではない。むしろ、従来の「現代文B」の評価のあり方を考えると、内容(コンテンツ)から能力(コンピテンシー)へという流れは、適応しやすいもののはずである。「現代文B」の枠組みの中で示す課題評価の方法が、「主体的に学習に取り組む態度」の評価につながっていくというのは、自然なことである。これまでに蓄積してきた授業のあり方や工夫を、新しい科目の観点別評価にどのように活かすことができるのかを考えた。

2. 評価方法 ～パフォーマンス課題の設定～

まず、教室でその文章を扱う前に、各自で文章を読み、内容について説明する課題に取り組んだ。そのうえで授業として読解していく。授業での読解が終わった後に、振り返りとしてはじめの課題についても再度、考えた。その際、「自分の読みに変化はあったか」についても考え、言語化した。さらに、発展的な内容として、筆者への反論を書いた。

授業前後での変化を捉えることで、国語の授業で培う能力についても自覚的になると想定して、計画した。教室内で教員や他の生徒の意見を聞くことで自分の考えを相対化し、多様な考えに目を向けることができるようになるのではないかと考えたのである。

授業前後での変化を自覚し、なぜ変化したのかを説明することができる。発展的な課題に取り組むことができ、本文についての理解から一歩進んで、自分の考えを持つことができている。この二点を中心に、「主体的に学習に取り組む態度」を評価した。

3. 単元計画

単元名は「文学の言葉(「姿——日本のレトリック」)」。学習材として尼ヶ崎彬「姿——日本のレトリック」(北原保雄監修(平成29年)『現代文B 改訂版 下巻』大修館書店)を扱う。「姿」と「内容」を比べ、和歌で求められていた「姿」の重要性を示す文章である。生徒は、授業での「読解」を行う前に課題に取り組む。一連の授業が終わった後に同じ課題に取り組んで、どのような変化があったと「自覚できる」かを教員が観る。

1 時間目 課題を入力(評論を読み、内容について説明をする課題)

2 時間目 教科書読解(浅野内匠頭と在原業平の比較)

3 時間目 教科書読解(古今集の「姿」「内容」と近代)

4 時間目 まとめ+課題入力(1時間目と同じ課題と、以下の課題を入力する)

- ・課題内容=第一回と最終回で説明は変わりましたか? 変わっていない場合は「変化なし」と書き、変わった場合は、「なぜ変わったか」を書きなさい。

- ・(追加課題)「姿——日本のレトリック」の内容を踏まえながら、筆者への「反論」を書きなさい。

5 時間目 全体の振り返り

課題の入力は全て Google フォームで行い、データとして編集したものをスクリーン等で共有している。

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

生徒には、授業前後での変化の自覚の有無を尋ねるとともに、発展的な課題として、筆者への反論を書いてもらった。内容を説明する課題自体は、初読でも対応できるように、基本的な課題とした。そうすると、いわゆる「読解力が高い」生徒は、授業前の段階でもこちらが要求する水準の説明ができてしまう。そこを想定しての発展的な課題（筆者への反論）であった。

生徒たちの状況は以下のようなパターンに分かれた。

①変化あり・反論あり ②変化あり・反論なし ③変化なし・反論あり ④変化なし・反論なし

①のように、変化の自覚があり、さらに発展的な課題にも取り組むことができている。これが「主体的に学習に取り組む態度」で評価すべき生徒である。ただし、項目が満たされていれば良いというわけではない。自己の変化についての言及の質が高くないものも存在した（授業を聞いてわかった、くらいの振り返りで終わっている）。

②のように発展的な課題に取り組むことができなかつたとしても、自己の分析に取り組むことができれば、「主体的に学習に取り組む態度」としては評価できるはずである。ここにも①と同様、自己の変化について拙い説明になってしまっている生徒がいる。

③には二つのタイプがいた。高い読解力に支えられてはじめての読みと後の読みで揺れがないタイプと、うまく読解できておらず、変化を自覚するところまで到達できなかったタイプとに分かれた。前者の反論は、多くの場合、上手にまとめ、高く評価することができた。後者の反論の中にも興味深いものはあったが、数としては少なかった。この③の生徒たちをどう評価していくのが大きな課題となっている。

④は「主体的に学習に取り組む態度」という観点からすると、高く評価することはできない生徒であった。

このようなかたちで生徒の変化の自覚を観察し、評価をしようと試みたものの、課題は多く残った。

まず、課題の設定について。初読の段階で難しい説明に挑ませると、授業での教員の説明を聞いて理解した、という単純な変化しか望めない。この課題がやさし過ぎれば、授業前後での変化が起こりにくくなってしまう。今回の課題がやさしすぎたとは思っていないが、読解力の高い生徒にとっては、簡単だったのかもしれない（授業で新しい読みの開拓や発見をしたとしても、はじめの課題の説明には反映されないようなものだった、ということがありうる）。読解力のある生徒をどう育てていくのか、課題の設定に工夫が必要である。

また、発展的な課題についても、問題はあった。はじめの課題が基本的なものだったことをうけて、最後の課題では発展的なこと（筆者への反論）についても考えたわけであるが、うまく読解できていない生徒も、自分の読みについて自覚になる前に、発展的課題に取り組んでしまい、反論のための反論（言葉尻をとらえるだけであったり、筆者自身が反論として想定していたものをなぞるだけであったりして、効果的な反論になっていない）になってしまった。

評価それ自体も問題を残している。変化の有無や発展的課題に取り組んでいるか、いないかだけでは、当然、評価することはできず、説明（本文の説明にせよ、変化の説明にせよ）について教員が読み込まなければならなかった。「主体的に学習に取り組む態度」を評価するためのものであったはずだが、明らかに「読む」「書く」（「知識・技能」「思考・判断・表現」といった別の力との連動で評価していくことになったように思える。三つの観点を完全に切り離すことは無理であるにしても、これらの混ざり合いが激しいと感じている。主体性を持っていても、それをうまく表現することができない生徒を評価することは難しい。また、主体性に乏しくても、読解力と表現力が突出していれば、それなりのものは書いてしまうかもしれない。「主体的に学習に向かう態度」の評価の難しさを改めて感じている。

次の機会に活かすべき要素もあった。生徒たちが自分たちの学習をメタ認知し、今、取り組んでいること（授業や課題）が、他のどのような学習機会につながっているかを把握すること。それがあれば、生徒は主体的に学習に向かうことができるだろう。そのための生徒の理解と理解に合わせた課題の設定のヒントは得られたように思っている。今後も生徒の主体性を育む授業、そしてその主体性を評価し、生徒にフィードバックできるような授業づくりをしていきたい。

研究協議会

国語科 「国語科のこれまでの蓄積と観点別学習状況の評価」

提案者 日渡 正行

助言講師 浅田 孝紀

1. 本校からの提案

学習材出典『日本のレトリック』について。西洋のレトリック、中国のレトリックに関する研究が盛り上がる中で「日本のレトリック」であった。今回授業で扱った箇所は、三章の「姿と心」に関する部分であるが、二章の「見立て」に関する論を踏まえて書かれている。教科書では省略部分もあり、原典よりもわかりにくくなっている。

観点別学習状況の評価について。国は資料を示しているが、評価基準・方法・実際の評価は現場に投げられている。教師の指導改善・生徒の学習改善につながるものにしていくことが重要。「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」を総合したものが評定である。「主体的に学習に取り組む態度」は、「自らの学習を調整しようとする側面」と「粘り強い取り組みを行おうとする側面」をあわせて評価するものである。

批判すべきは「自覚された授業」であり、「学習指導案」をもとにした批判をお願いしたい。

【授業者へのインタビュー】

- ①授業中の感情：「難しい」と感じた。教材自体が難しい。こちらが設定した評価の枠組が機能するか心配だった。
- ②授業中の考察：生徒間の差が大きい。これまでの学習履歴と教材をいかに関連づけられるか。
- ③やりたかったこと：授業で読解する前と授業を受けた後の変化の自覚を促したかった。
- ④できたこと：授業の前と後で同じ課題に取り組み、変化やその理由を考えさせることができた。

2. 協議会における議論

【グループ別討論】

- ①「今回の授業を参観して感じたこと・授業者への質問など」
 - ・教員の主観がどうしても入ってしまうので、客観的評価が難しく感じた。
 - ・自分の学習の変容をメタ認知させる方法は、有効であると感じた。
 - ・はじめから理解できている生徒をどのように評価すればよいのか、難しく感じた。
- ②「主体的に学習に取り組む態度をどう測るか 実践や研究などを通じて思うこと」
 - ・言語活動を観察した様子や発言の量、話し合いでの積極的な参加なども含めて見取りたい。
 - ・パフォーマンス課題や振り返りシートの記載内容で評価しようと考えているが、業務が忙しくなり処理しきれない。
 - ・単元の途中での段階的な評価と単元の最後での包括的な評価を併せて行うと良いと思う。
 - ・アウトプットだけでなく、インプットをどれだけ自覚できたかを見る評価材料があっても良いと思う。

【質問事項】

- ・ループリックはどのように提示したのか。→今回は提示していない。
- ・振り返りがどう行われたのか。→ループリックによって数字で示すことはできるが、まだうまく消化できていない。
- ・どのように考えてその問いを立てたのか。→抽象的な問いを立てることで、本文の理解をはかった。

3. 課題

主体的な態度を評価するのは「難しい」という意見が多い。客観的に評価しようとする自体が難しい。主観的な評価であったとしても、授業者がポジティブに学習者を見取っていかうとする姿勢が大切である。学校や生徒の実態によって変わるものであるため、現場で考えていかなければならない。

日常的・学期の節目ごとに、生徒を見続けていくという「継続性」こそが重要である。

公開研 公開授業◎

地理歴史（世界史）「世界史探究を見据えて ～日清戦争を再考する～」

授業者 小太刀 知佐

1. 研究主題との関わり

今年度より、本校でも新科目の歴史総合が始まった。知識詰め込み型の歴史科目からの脱却、日本史と世界史の融合、生徒自身が課題を設定し、問いをたてて問題を追究し解決を目指すといった試みが目指されている。本公開授業は2年生の世界史Aの授業内で、歴史総合や世界史探究を意識した授業実践を目指したものである。歴史総合は近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉え、資料を活用しながら歴史の学び方を修得し、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察、構想する科目とされている。従来の通史中心から、「近代化」「国際秩序の変容と大衆化」「グローバル化」の3つのテーマを軸に、生徒自身が知識を概念化することが重視されている。中学校までの学び、さらに必修科目である歴史総合を経て、選択科目として世界史探究があり、ここではそこまで身に付けた歴史的思考力を生かして、諸資料を活用した学習が目指されている。本時は旧課程の世界史Aの科目での実践のため、生徒の目に直接触れる形で観点別評価での成績は開示していない。次年度に向け、年間を通じて科目内で検討しているところである。

今年度、世界史Aでは「評価につながる課題」と、生徒の反応や理解度を確認するための「確認・授業改善のための課題」に分けて課題を設定しており、評価につながる課題として1学期には授業内で1時間（50分）の時間を取り、生徒にレポート課題を課している。2学期には今回の研究授業・協議会での議論を踏まえ、「学びに向かう姿勢」として自らの学びを調整する能力の育成を目指すワークシートを用意した。（いわゆる「一枚ポートフォリオ」については、山梨大学名誉教授の堀哲夫先生が提唱されている。）本時の授業での問い・課題は直接評価に直結するものではないが、これら課題に取り組む際の足掛かりとなる。

2. 評価方法 ～パフォーマンス課題の設定～

本時の中心の問いとして、「日清戦争を世界史という視野で再考する」（Q.日清戦争の世界史上の位置づけとは？）を設定した。資料の活用を目指し、特に時間をとって生徒自身が読み取りをする文字資料を2点と風刺画を2点用意した。日清戦争当時の駐清アメリカ公使による日清戦争観がうかがえる資料からは、欧米の政治家からみた日清戦争の意義の読み取りを目指す。一部教員からの説明もあるが、風刺画の読み取りや資料読解（空欄補充）、そこからの話し合い活動を入れ込むことで、当時の東アジア情勢やその背後にいる欧米列強の存在、その思惑を生徒自身が読み取ることができるよう授業を構成した。もう一点の駐日清国公使館参贊官の黄遵憲による『朝鮮策略』はやや読み応えがあるが、清朝から朝鮮に当時の国際情勢をどのように切り抜けるべきかを教えるものであり、どの国と結びどの国を警戒すべきか、といった国際情勢分析が書かれている。生徒自身にこの資料を読み取らせることで、当時の朝鮮をめぐる国際情勢を分析させた。風刺画の1点目は下関条約の結果を描いたドイツの風刺画、2点目は日清戦争そのものよりも背後にいるロシアの存在感を強調したイギリスの風刺画である。ドイツの風刺画でも、朝鮮の独立をその大義名分として日本が主張していたのに対し、医者として描かれた日本に追随する看護師として朝鮮を描いている、というところから、当時の西欧の視点も盛り込んだ。これら諸資料の分析には授業内で時間を取り、個人作業とグループ作業どちらでも可能とした。考察内容は授業プリントとして配布しているワークシートに書き込ませることで、学習の記録とした。歴史総合や世界史探究が目指す諸資料の活用や、自分ごととして歴史をとらえる学習姿勢の育成を意図した課題であった。

3. 単元計画

本時に至るまでの6時間、教育実習生が西アジア・東南アジア・インド・中国について授業を行ってきた。続く7時間目では実習生の授業のまとめとして、Q.アジア各国にとっての「近代化」とは何だったのか？という問いを与

え、授業内で取り組ませた。(この活動は、< 確認・授業改善のための課題 > とした。) 幅広いエリアや国を扱う本単元であるが、この時代や地域を貫く問いや共通点といった大枠を意識した単元計画を心がけた。「近代化したヨーロッパに対して遅れていたアジア」「アジアが近代化/西欧化していく過程」といった単純な二項対立ではなく、なぜこの時代のアジアでは改革が目指されたのか、西欧の接近がこの地域にどのような影響を与えたのか、この時期のアジア各地の特徴や共通点とは何か、を単元を通じた問いとして設定とした。

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

風刺画や資料の読み取り、それを元にした話し合い活動は日常的に授業の中で取り組んでおり、生徒も与えられた課題には積極的に取り組んでいた。一方で穴埋め式のプリントに慣れているせい、口頭での話し合い活動は積極的に行うが、自分の意見としてプリントにまとめるのを躊躇し、教員からの解説や模範解答を待つ生徒もみられた。やはり歴史とは正解があり、授業内でその答えが提示されるはずという意識を持った生徒が一定数いるようである。今後この生徒の学びの記録を重視し、観点別評価に生かしていく場合に、どのように生徒の積極的な活動や記録活動を促すことができるかが、今回の研究授業の課題であった。そこで、同学期に実施した次の単元である帝国主義では、単元の冒頭や授業中の随所で、これまでの学びを振り返り生徒自身が次の時代の展開を予想し、記録するワークシートを用意した。これまでの学習のまとめから、そこから予想される内容、そして授業で情報の追加や修正があれば加筆していく、という用紙である。まず既習事項の確認から入るため生徒の記録や話し合い活動が以前よりも活発になり、自ら予想を立ててから授業に臨むため、より理解が深まっているという手応えを感じている。この記録をどのように評価の対象とするかを今学期の課題とし、評価に盛り込む予定である。

参考：次単元で試用したワークシート

	19世紀前半の国内の動き	労働運動など	⇒予想される展開
イギリス	自分の予想：	産業革命 達成 ・ 未達成 労働運動 盛ん ・ まだ	自分の予想：
フランス	自分の予想：	産業革命 達成 ・ 未達成 労働運動 盛ん ・ まだ	自分の予想：

※実際はイギリス・フランス・ドイツ・アメリカ・ロシアの5か国記入欄があり、その国を扱う冒頭で予想部分を書かせて情報を共有し、授業中に得た新たな情報を加筆・修正していくよう指示を出した。

研究協議会

教科（地理歴史・公民）「地歴科・公民科における観点別評価の実践と課題」

提 案 者 地理歴史・公民科

助言講師 藤野 敦

1. 本校からの提案

(1)公開授業について

公開授業では、新科目として今年度から始まった歴史総合を受け、さらに世界史探究を見据えて資料活用を意識した授業を構想した。日本史・世界史という枠を超えた視点や事件そのものではなく地域や時代で学ぶ意義をとらえることが、今回の歴史総合では求められている。今回の授業では、「日清戦争の世界史上の位置づけとは？」という問いをメインで据えたが、これは現在発行されている各出版社の歴史総合の教科書でも、「日清戦争はどのようにはじまり、どのように展開したのだろうか。」「日清戦争は、何を目的にはじまったのだろうか。」「近代化の進展により、日本・清・朝鮮の国際関係は、どのように変化したのだろうか。」といった問いとして扱われている。資料の活用や観点別評価につながる課題の設定のため、単元計画や年間予定表も教科書の見出しではなく、今後は問いを中心に授業計画をたてる必要がある。年間構想として単元ごとの問いや各3つの観点を評価する課題の設定・回収が予定されるべきであり、年間を通じた何をどのように評価するのかの整理が求められる。「成績に加味されるから」ではない、生徒の積極的な授業参加を促す仕掛けや動機付けをどのように引き出すことができるのか。その点をうまく引き出すことが、学びに向かう姿勢や学びの自己調整力につながるはずである。

(2)本校1学期の観点別評価の実践紹介

1年生の歴史総合と地理総合、観点別評価の実施を見据えて試験的に行った2年生の世界史Aと現代社会の課題とそれをもとにした評価の実践報告を行った。いずれも試行段階であり、各教科で模索が続いている。

2. 協議会における議論

公開授業についてはまず問いの設定について質疑が行われた。問いを生徒がたてることから授業を始める実践や、今回のように教員が設定することもあるが、そのバランスの重要さが指摘された。教員が主体となり進めたい場面と生徒自身の問いをうまく混ぜ、生徒の問いを通じて生徒の学びの実態や世界観が見えてくることで、授業自体の質の向上にもつながることが期待される。次に資料の活用については小学校での実例が紹介され、今回の改定でなぜ資料の活用が強調されているのか、という原点が確認された。資料そのものを理解することに留まらず、資料をもとに理解を深め、事象の理解に到達することが求められる。

観点別評価については、複数教員で共通の評価を行なっている本校の事例を受け、授業者による評価のブレの解消について議論となった。ルーブリックの活用以外にも生徒の相互評価や複数の視点からの評価の有効性が提案されたが、やはり最終的には教員間の相談や意思疎通が重要である。管理職など教科を超えた第三者が客観的に評価を見直す、という実践も紹介された。助言講師の藤野氏からは、上記以外にABC評価をつける際の注意点として「目標達成がBである」という点が再度確認された。何をBとするかは各学校の実態に応じて具体的に設定が可能であり、それを学校全体で共有することが重要である。主体的に学習に取り組む態度についても、授業中の授業態度や発言回数といった表面的な部分にとらわれず、生徒自身が自らの学びをコントロールする力であり、学びを粘り強く自己調整する能力の育成を目指す観点であることが確認された。

3. 課題

資料活用については、生徒は文字資料・風刺画ともに課題に取り組んだものの、生徒の意見を聞きながらも教師が資料を解説する授業に陥ってはいないか？という点が課題として挙げられた。資料「を」理解する授業と資料「で」理解する授業の違いを意識し、新科目が新たな暗記科目とならないよう留意したい。観点別評価については、指導の改善が図られてこそその評価の改善であり、課題や評価の付け方まで含めた単元をしっかりと作ることが求められた。

公開研 公開授業◎

数学科（数学Ⅰ）「相関係数を見直そう」

授業者 木部 慎也

1. 研究主題との関わり

本校数学科では、単元「データの分析」の目標を「統計的探究プロセスの各段階と対応させながら、学習する統計量やグラフの意味と目的を理解し、振り返りから新たな問いの設定を繰り返すことでより深い統計的問題解決の活動を行うことができる。」とし、例年単元のまとめとしてレポート課題を設定している。そのレポート課題では、実際のデータを分析するための知識・技能だけではなく、統計的探究プロセスを踏まえて、より深い分析を行う思考力・判断力・表現力や主体的に学習に取り組む態度を見取ることができる。今年度は、各観点との対応をより明確にするため、ループリックの改訂を行なった。本授業では、レポート課題を念頭に据えつつ、実際のデータを分析する過程の中で相関係数の性質をより深く考察し、その問題解決の活動と統計的探究プロセスの各段階と対応させながら統計的問題解決を経験することを目指す。

2. 評価方法 ～ パフォーマンス課題の設定 ～

単元のまとめとして、統計的問題解決に取り組むレポート課題を下記の要領で設定し、ループリックで評価する。

- 1) 問題 調べたい事柄を明確にする
- 2) 計画 SSDSE または e-Stat から必要なデータをダウンロードする
- 3) データ データ全体の分布の特徴やデータの間にある関係を表現する
- 4) 分析 データから分かったことや、その要因について考察する
- 5) 結論 分析結果から結論をまとめ、振り返って新たな問いに繋げる

評価の観点	具体的な評価事項	3	2	1	0
思考・判断・表現	統計的に解決可能な問題か。	統計的に解決が可能であり、有効である。	統計的に解決が可能である。	統計的に解決が可能とは言いがたい。	明らかに解決不可能である。
知識・技能	データの選択や整理は適切か。	データの選択や整理が適切に行われており、複数の工夫がみられる。	データの選択や整理が適切に行われている。	データの選択や整理に不適切な点がある。	データの選択や整理に致命的な不備が多い。
思考・判断・表現	分析の結果の考察は適切か。	分析の結果の考察が適切に複数の観点で行われている。	分析の結果の考察が適切に行われている。	分析の結果の考察が不十分である。	分析の結果の考察がほとんどされていない。
主体的に学習に取り組む態度	結論を振り返り、新たな問いを設定しようとしているか。	結論を振り返り、新たな問いを設定し、より深い問題解決しようとしている。	結論を振り返り、新たな問いを設定しようとしている。	新たな問いを設定しようとしている。	新たな問いを設定しようとしていない。
思考・判断・表現	読み手に伝わる丁寧でわかりやすい説明がなされているか。	読み手に伝わる丁寧でわかりやすい説明がなされている。	一部に整合性の取れていない記述がある。	説明が不十分な箇所も多いが、概ね理解できる。	説明が不十分な箇所が多く、理解することが困難である。

3. 単元計画

単元計画の中で、統計的探究プロセスの各段階と関係の深い活動は以下の通りである。

- ① 問題
 - ・ 4時間目：ノルディック複合において、ジャンプとクロスカンツリーの結果を公平に扱う方法を考える。
 - ・ 7時間目：野球のピッチャーの球速と体力テストの結果の関係性を表現する方法を考える。
 - ・ 14時間目：婚姻数と関係の深いデータを考える。
- ② 計画
 - ・ 14時間目：相関係数に影響している共通の要因を考察し、集めるべきデータを整える。
- ③ データ
 - ・ 7時間目：野球のピッチャーの球速と体力テストの結果の相関関係を考えるために散布図に表してみる。
- ④ 分析
 - ・ 6時間目：PCを用いて、具体的なデータに対して統計量を求める。
 - ・ 11時間目：PCを用いて、具体的なデータに対して相関係数を求める。
- ⑤ 結論
 - ・ 1時間目：外れ値の判断に四分位範囲を用いることを批判的に考察し、分散を算出する方針を立てる。
 - ・ 14時間目：相関係数の結果から導ける事柄を考察する。

4. 評価の実際 ～単元における生徒の変容と今後の課題～

授業においては「都道府県別の映画館数と婚姻件数の相関係数は0.9を超える。映画館を増やせば婚姻件数も増えるはずだ。」という例を出発点に、SSDSEから引用したデータの分析を通して、相関係数を見つめ直した。その後提出されたレポートの中で特徴的であった例を以下に示す。

例1：気温と日照時間がもたらす睡眠時間への影響

「5-1. データを分析した結果わかったこと：分析を見ると分かるように、全国と地方別では相関係数が大きく異なってくるということが言える。また、「A、D」、「B、D」、「C、D」のどの指標に関しても全国と地域別全てにおける共通点というものがない。それは何故だろうか。僕は、現代社会において気温、日照時間などの自然的要因よりも社会的な要因が大きく影響していると考えた。～中略～社会的要因との関係を確認するには、電子機器がまだあまり発達していない時代（半世紀前など）の同様のデータと比較すれば良いのではないかと感じた。」

→考察から出てきた仮説をデータを根拠に説明している。次の問いを検証するための計画ができています。

例2：「バルクマンの法則」は日本人に当てはまるのだろうか。

「2'. Plan (計画と予想)：次の3つの仮説に基づいて都道府県を絞り込み(BとCは上位30都道府県)相関係数を出す。A：本州にある都道府県に限定すれば、気候など環境の違いが原因の外れ値が減るのではないか。B：人口あたりの他県からの転入者数が少ない都道府県に限定すれば、より純粋なデータがとれ、相関係数が高くなるのではないか。C：人口集中地区人口が多い都道府県に限定すれば、同じ都道府県内でも生活環境が似た人が多いためより純粋なデータがとれるのではないか。」

→2'とあるのは、2周目のサイクルであることを意味している。この生徒は最終的に統計的探究プロセスを3周したレポートを提出した。毎回の考察から新たな問いを見出し、次の計画に生かすことができていた。

例3：大学進学率の地域格差はどこから

「親世代の進学率を求めるにあたっては、2020年に大学進学する子供の親は1992年に大学進学した、つまり、28歳前後で子供をもうけていると考えた。これは厚生労働省の出生順位別にみた母の平均年齢の年次推移を参考にした。また、進学率は大学進学者数/総人口で求めたため、相関関係をより正確に読み取るためになるべく同じ年度のデータを揃えた。」

→分析するデータの整理の仕方には課題が残るが、考えた経緯が詳細に記述されており、データを根拠にして考察を深めていこうとする姿勢が見える。分析後の考察として、「進学率」という指標をどう定義すべきか、自分が比較しようとしていた視点を見つめ直しながら振り返ることもできていた。

研究協議会

数学科 「観点別評価の充実と深い学びの実現に向けた単元計画」 ～単元「データの分析」に焦点を当てて～

提案者 数 学 科
助言講師 長尾 篤志

1. 本校からの提案

【現1年生の観点別評価についての現状と課題】

- 現状**・知識・技能の評価方法は従来型で「小テスト」と「定期試験」。
- ・思考・判断・表現の評価については、無解答にならないように誘導等で工夫。目標とする問題として担当者の共通認識ができるようにする。
 - ・主体的に学習に取り組む態度はその単元の主軸になる問題について GoogleForms による振り返り。
- 課題** 思考・判断・表現について授業の主軸となるテーマを明確にすることや、単元のテーマを年度当初で共有できるようにすること。主体的に学習に取り組む態度についての評価方法がこのままでいいか。

【公開授業より】

PPDAC サイクルを繰り返し、精度をあげて考察を深めていきたい。生徒の振り返りについて、具体的に述べることを目指している。生徒のレポート課題の例では、PPDAC のサイクルを3周した生徒がいたり、そもそもどのようなデータを使うかの吟味があるといいものなどがあげられる。

- 提案**・思考力・判断力・表現力の育成という目標に対する本実践の価値。
- ・実際の授業で深み学びを通した思考判断表現力の育成がいかに行われたか。
 - ・観点別評価について。

2. 協議会における議論

【授業について】

- ・授業のそもそもの問題が何か。問題解決者なのか学習者なのかの認識をしたほうがいい。
- ・「因果関係を推定するのは難しい」ということを生徒が体得するための何らかの活動が必要だったのではないか。

【観点別評価について】

- ・定期考査の振り返りでは態度だけでなく思考判断表現も評価できるのではないか。
- ・解き直して評価するというのはどうか。どういう思考がたりなかったかの振り返りは大切。振り返りの過程で生徒が新たな課題を見つけることがある。
- ・単元計画や題材は、大事にしたいところと育てたい資質は共有。それに直結する授業、課題は分担して提案する。核となるところは共有。その他は各担当に任されている。

【助言講師より】

- ・他教科との連携で単元計画を考えていくことが必要。偏差など意味を考えることが大切。
- ・統計の題材を用いて、批判的に考える力を育てる。生徒に問いをたくさん持たせることが大切。レポートのルーブリックについては新たな問いを設定しようとしているか、ということの評価事項としているのはいい。プレゼン、課題、テストなどいろいろな評価の仕方を考えていくべき。
- ・評価の役割は教師にとっては授業改善に資すること、生徒にとっては学習改善に資すること。教師は毎授業後、生徒は単元終了後行っていく。

3. 課題

- ・探究型の授業のためにさらなる指導計画の工夫。
- ・他教科との連携。
- ・普段の授業での実現目標を考える。

公開研 公開授業

理科（生物）「学びを社会へつなげる —『遺伝子とその働き』ゲノムを題材に—」

授業者 小境 久美子

1. 研究主題との関わり

生命科学が急速に発展した現在では、多くの情報を客観的に受け止め、主体的に判断・意思決定していく態度が求められる。本時は「遺伝子とそのはたらき」の単元でゲノムを題材として扱い、近年身近になってきている遺伝子検査などについて取り上げて、生徒が主体的に判断・意思決定を行う場面を設定した。まず「ゲノム」より身近な「遺伝」の現象を考えることからはじめ、「遺伝」と「ゲノム」をつなぐものとして、一塩基多型 (SNP, スニップ)、単一遺伝子病、多遺伝子疾患を説明した。ゲノムの個人差が0.1%であることやSNPのデータベース検索を行うことを通し、ゲノムのわずかな違いによって形質の違いや病気が生じることを客観的にとらえられるように注意した。

評価の観点では、ゲノムの個人差や遺伝子検査のメリット・デメリットについて、主体的に考察して表現しようとしているかどうかを「主体的に学習に取り組む態度」として記述分析することとした。

2. 評価方法 ～パフォーマンス課題の設定～

「生物基礎」の「遺伝子とそのはたらき」の単元では、遺伝子とゲノムとの関係に触れることとなっており、オーダーメイド医療などが発展的な学習内容で教科書に取り上げられている。「知識・技能」の評価規準は、遺伝情報とDNAの基本的な概念を理解していること、観察・実験における基本操作および記録ができることとして、1学期期末考査、また、本時以降に行ったDNA抽出、体細胞分裂の観察実験において評価した。「思考・判断・表現」の評価規準は、遺伝情報とDNAについて見通しをもって観察、実験を行うこと、科学的に考察し表現していることとして、実験レポートの評価を行った。また、本時ではSNPのデータベース検索を行ったが、これを「知識・技能を活用した課題解決のための表現力」として、調べた結果を適切に表現できているかどうかを評価した。「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準は、遺伝情報とDNAに関する事物・現象に進んで関わることとして、本時でオーダーメイド医療につながるSNPを取り上げ、ゲノム検査の受検など主体的な判断・意思決定を行う場面を設定した。

3. 単元計画

1学期の授業で「遺伝子とそのはたらき」の単元（東京書籍「生物基礎」第2編1章）に入った際、「親子の写真を見て「遺伝するものと遺伝しないものをあげてみよう～容姿や声、趣味や知識など、さまざまな観点で考えよう」という課題を課したときには、生徒から様々な形質が挙げられた。1学期終了時までの授業では、DNAの構造、塩基配列と遺伝情報、形質、ゲノムといった内容を扱った。本時は、2学期はじめの授業であり、遺伝情報の個人による違いに重点を置いて授業を行った。生物の遺伝情報は、同じ生物の個体の間でもわずかな違いがあること、ゲノムのわずかな違いによって形質の違いや病気が生じることを取りあげた。本時以降は、「遺伝情報とタンパク質」について、DNAの複製と体細胞分裂、塩基配列によって決定されるタンパク質のアミノ酸配列などについて学習した。

4. 評価の実際 ～単元における生徒の変容と今後の課題～

(1) SNPのデータベース検索

ALDH2 (アルデヒド脱水素酵素2) のSNPを調べ、活性型と不活性型ではどのように違うのか、という課題を課した。何番染色体の何番目の塩基がA,G,C,Tのいずれかからどう変わっているのかを説明することとしたが、調べた結果を適切に表現できるかどうかには差が見られた。「第12染色体の111803962番目の塩基が活性型ではG(グアニン)だが、不活性型ではA(アデニン)に変化している。」と説明することを求めたものであるが、データベースで表記されているままの「G>A」と書かれている回答もあった。また、「GからAになった」とする回答もあった。個人間で見られる多型と突然変異の現象とが、生物基礎を学習している段階では整理できていないことが原因と考えられる。

(2) 遺伝子検査についての主体的な判断・意思決定

本時ではゲノム検査を受けるかどうか検討するという場面を想定し、以下の5つの問いを生徒に課した。

1. 「遺伝子の変化による疾患」単一遺伝子疾患について、あなたは遺伝子検査を受けたいと考えますか。受けたい・受けたくない・その他
2. そう考える理由を述べてください。
3. 「生活習慣病」について（多因子疾患、環境要因の影響が大きい疾患）に「かかりやすい」かどうかについて、あなたは遺伝子検査を受けたいと考えますか。受けたい・受けたくない・その他
4. そう考える理由を述べてください。
5. 感想・もっと知りたいと思ったこと

2と4の「そう考える理由」についての記述に着目し、評価を【A】自分自身のこととしてとらえて意思決定しようとしている【B】遺伝子検査について、メリット・デメリットをふまえて考えることができる【C】遺伝子検査について、メリットまたはデメリットを挙げられる のように行うこととした。

「遺伝子の変化による疾患」単一遺伝子疾患について「受けたい」と回答された中の記述には、以下のようなものがあった。【A】自分や自分の家族がかかるかもしれない病気の可能性やその情報について早い段階で知っておきたいから。早いうちに知って暗い気持ちになってしまうかもしれないけど、いざ病気が発覚してから治療を始めるよりは前もって知っておくことで症状を軽減できて今後の人生を変えられるかもしれないから。自分や大切な家族を守るためには受けるのが最善の選択だと思った。【B】疾患に罹りやすかったとしても、治療法が確立していれば早期治療に繋げる事ができる。また、治療法が不確かであったとしても、心の準備ができるのは良いと思った。【C】今後の予防や治療につながる。

一方、「受けたくない」と答えた回答では、以下のようなものがあった。【A】今15歳の時点で検査を受けてもし仮に陽性だった場合、その後の生活に負担がかかたりしてしまう可能性がある。そして精神的にも疾患を患ってしまうというという恐怖を持ちながら生活していかなければならないので楽しく過ごしたい私は検査はしたくない。でも何年かして症状が出てきた時に検査して病気と判明した時の絶望感はずごいと思う。判明した時から療養していくか今検査して早期発見した時からずっと生活に気を遣っていくかを考えたときに大人になってから検査で陽性と分かったほうが良いと思った。【B】知りたくないことも知ってしまう可能性もあり、それによる精神的ダメージが大きいと思うから。また、膨大な個人情報であるためリスクが大きいなどメリットよりもデメリットが勝ると思う。【C】出た結果が必ずしも正確とは限らないものにお金を払うのは躊躇われるから。

生活習慣病については、環境によって変わってくる、信憑性が低いことなどが挙げられ、「受けたい」という回答が上記の単一遺伝子疾患より少なかった。いずれも遺伝子検査を病気の早期発見や治療に生かせると思う一方で、自分の将来を予測することや、家族などにも当てはまる情報を得ることのデメリットについて慎重に考えている様子がうかがえる回答が多かった。

(3) 今後の課題

研究協議会で指摘された課題として、上記(2)の評価が、生徒の書く記述量に依存してしまうことがあった。また、本時の目標が「学びを社会へつなげる」であるのに対し、「おおむね満足できる」状況の【B】にその内容が反映されていないことも挙げられた。授業内でグループの話し合い活動をもったため、メリット・デメリットについて述べていることを評価【B】としたが、他者の意見を自身の意思決定に活かすことも社会とつながる行動であり、何をもって目標を達成したとするかの議論があった。

助言講師である三石初雄先生（東京学芸大学名誉教授）からは、意思決定場面の公教育での位置づけの検討についてお話いただいた。科学技術の利用においては、“ベネフィットとリスク”を根拠をもって示したうえで意思決定場面を積極的に導入することが、主体性を育てることにつながるということが話された。意思決定は個人で行うものであるが、公教育では意思決定場面で同時に他者、他見解の存在、情報・場面状況の共有がある。複数の見解があり、かつそれが同時には成立しにくい価値選択的課題（三石・中西，2016）に対し、理科の授業でどのように扱うか、多くの助言をいただくことができた。

5. 引用文献

三石初雄・中西史 編著『教科教育学シリーズ4 理科教育』一藝社、2016年

公開研 公開授業

理科(地学)「地学基礎における『指導と評価の一体化』を目指したカリキュラムづくり」～生徒の主体性を育てるための評価～

授業者 齋藤 洋輔

1. 研究主題との関わり

一昨年度の公開教育研究大会(以下、公開研と表記)にて、同タイトルで地学基礎におけるカリキュラムづくりについて提案した。これまでの実践も踏まえながら、観点別学習状況の評価が実際に始まった今年度は、特に生徒の主体性を育てるための評価に焦点を当て、「指導と評価の一体化」を目指したカリキュラムについて改めて提案した。具体的には、Google Workspace for Educationをプラットフォームとして反転授業を年間通して実施することで、生徒が自主的に学ぶことを促した。また、「岩石(火成岩)の観察」をはじめとするそれぞれの授業でも、資質・能力の育成を目指し、それらを有機的につながるように配置することで、自主性を涵養するカリキュラムづくりを目指した。なお、本公開研は、動画配信での運用ということで、その特徴を活かして、一つの授業に焦点を当て過ぎずに、生徒の成果物とその評価の方法に焦点を当てながら地学基礎におけるカリキュラムづくりについて提案した。

2. 評価方法 ～パフォーマンス課題の設定～

提案した動画の中では、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「学びに向かう態度」のそれぞれの評価場面の授業事例を提案した。ここでは、その中でも主題である「生徒の主体性」を育てるために設定した「学びに向かう態度」の評価場面について取り上げたい。以下の2点は、「学びに向かう態度」の中でも、主に「自らの学習を調整しようとする側面」に働きかけるものである。また、本公開研の講演者であった市川伸一先生(東京大学名誉教授)も、学習を主体的に進めるために“学習の自己調整(工夫や改善)”を重視されていたが、それに関連するものと言える。

(1) マインドマップの作成 ～既習内容をつなげ、概念を形成する態度を評価する～

一つ目は、1学期後半に、「プレートテクトニクス」の学習が終わったところで出したパフォーマンス課題で、複数の既習事項(プレート、火山、火成岩など)を1つのマインドマップにまとめさせるものである(図1参照)。プレートや火成岩に関する断片的な既習内容を結びつけ、整理して、概念を形成しようとするような態度は、前向きに学習に取り組み、自己を向上させようとする態度として評価できると考えた。

(2) 自己の取り組みの分析 ～「岩石の観察」のレポートを改善させる態度を評価する～

二つ目は、1学期末の「岩石の観察」のレポート時に出したもので、1学期中の課題とそれに対する教員からのフィードバックを踏まえて、「岩石の観察」のレポートで改善しようとしたことは何かを問うパフォーマンス課題である(図2参照)。自分の課題(足りない部分・改善したい部分)を正しく把握できている上で、実際に「岩石の観察」のレポート上で正しく改善されているのか評価した。地学基礎における自己の学習について、自己で課題を見出し、それを改善しようとする態度を評価した。

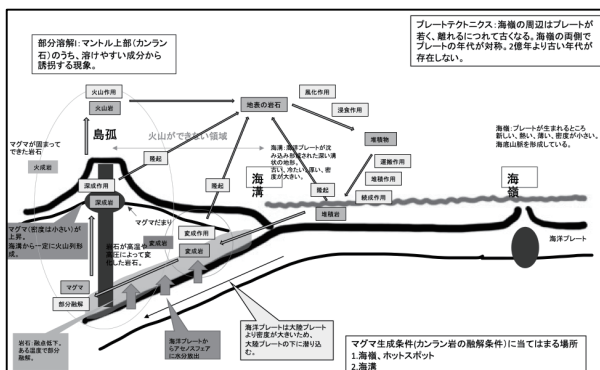


図1 生徒が作成したマインドマップ

図2 「岩石の観察」・自己の取り組みの分析

3. 単元計画

1学期の授業においては、地球の形・内部構造・プレートテクトニクス（東京書籍「地学基礎」第1編1章）、火山、火成岩と鉱物（第1編2章）を学習した。そのまとめの授業として、「岩石（火成岩）の観察」が設定した。2学期の授業では、11月初旬に神奈川県 三浦半島・城ヶ島で行われる「野外実習」に向けて、地層の観察（第4編1章）の学習に取り組んだ。「岩石（火成岩）の観察」や「野外実習」をカリキュラムにおける“ピーク”とし、その他の授業での様々なパフォーマンス課題が資質・能力の育成の場（練習の場）として、有機的につながるように位置付けた。また、2学期後半から3学期にかけては、天文分野（第3編1章）や環境分野（第2編1章, 2章）の学習に続き、それまでに育成した資質・能力を活用する場として数多くのパフォーマンス課題が設定した。

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

(1) マインドマップの作成 ～既習内容をつなげ、概念を形成する態度を評価する～

生徒が作成したマインドマップについて、4段階のルーブリックで評価した結果を図3（左）に示した。なお、地学基礎におけるルーブリックは常に「2」を最低限、到達すべきレベルと設定している。図3（左）によると、「1」と評価された生徒が4割弱もあり、課題の意図（様々な既習内容をつなげること）を理解しないままに、課題に取り組んでしまった生徒が数多く見られた。また、課題を十分に進めるだけの時間を生徒に与えなかった点も反省点と言える。

(2) 自己の取り組みの分析 ～「岩石の観察」のレポートを改善させる態度を評価する～

「岩石の観察」のレポート作成に向けての自己の取り組みの分析について、4段階のルーブリックで評価した結果を図3（右）に示した。上記(1)のように課題の意図を理解していないことなどをフィードバックした上で実施した「岩石の観察」のレポート作成であったため、何かしらの改善点を認識できた生徒が多かった（評価「2」に相当）。その上でうまく改善できた（評価「3」以上に相当）生徒は4割弱に止まった。

(3) 反転授業への生徒の評価と今後の課題

地学基礎の授業についての生徒アンケートの結果を図4に示した。図4（左）は“魅力ある授業が展開されており、学ぶ面白さを感じますか？”，図4（右）は“YouTubeを活用した反転授業についてどのように思いますか？”の問いに対する回答結果である。どちらも肯定的に捉えてくれた生徒が多く、このようなカリキュラム運営は生徒が主体的に学ぶための基盤となっていると考える。

次に、研究協議会で指摘された課題についてもまとめたい。助言講師である三石初雄先生（東京学芸大学名誉教授）からは、主体性を育てるに当たって、本カリキュラムの中で実施しているように、振り返りを共有すること（例：良い作品を共有すること、改善点を指摘し合うこと）について評価して頂いた。その一方で、ルーブリックの評価指標や評価基準を同僚間（同教科, 学年, 学校）で評価観を共有することの必要性を指摘された。さらに、“癖づける”ことや“慣れさせる”ことを意識して、様々なこと（評価基準・ルーブリック、課題の形式など）を繰り返すようにカリキュラムをデザインしたが、その点に関しても、癖から脱出することでの“独自性・創造性の獲得”を得るのでは、という指摘を頂いた。これらの課題は理科全体、そして学校全体で取り組むべき課題として、今後の改善の方向性を示して頂いたと言える。

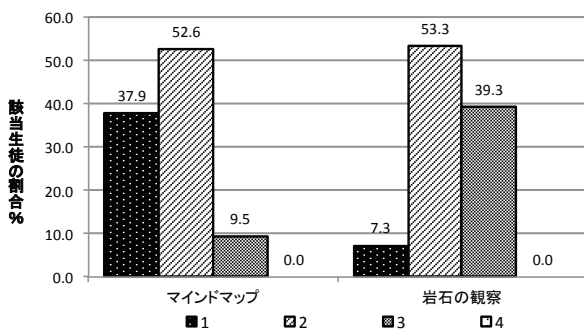


図3 ルーブリックによる評価の分布
（左）マインドマップの作成（右）自己の取り組みの分析

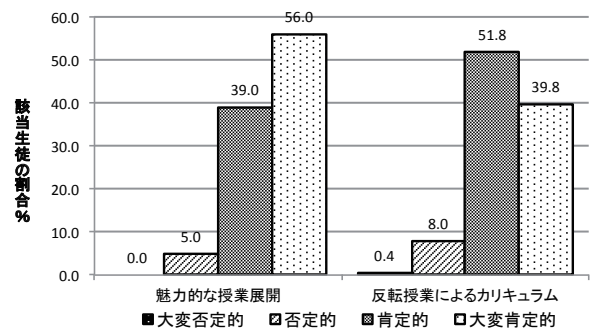


図4 地学基礎の授業についての生徒の評価
（左）魅力的な授業展開か（右）反転授業をどう捉えるか

研究協議会

理科 「学びを充実させるための観点別学習状況の評価」

提案者 理 科
助言講師 三石 初雄

1. 本校からの提案

(1)本校の理科の教育課程（本校 田中義洋 教諭）

本校の理科の教育課程の特徴として、1960年の改訂以降、1年次の生物・地学で具体的なものの見方、2年次の化学・物理で抽象的な視点で学びを深め、総合的な見方を養うことを目標に据えている。基礎を付した理科4科目が必修の教育課程で、「本物教育」をキーワードとして、フィールドワークや観察・実験を重視していることが特徴である。

(2)学びを社会につなげる～「遺伝子とその働き」ゲノムを題材に～（本校 小境久美子 教諭）

SNPについてデータベース検索から、SNPが病気の要因となることについて学ぶ。SNPの例として、耳垢、アルコール耐性、発病のリスクを説明し、そこから単一遺伝子疾患についての遺伝子検査のメリット、デメリットを考察させた。また、自分自身はどう思うか、遺伝子検査を受けたいと思うか、班ごとに議論させた。

(3)地学基礎における「指導と評価の一体化」を目指したカリキュラム作り（本校 齋藤洋輔 教諭）

生徒の主体性を育むために10～15分程度の動画を用いて反転授業に取り組み、授業はできる限り観察・実験や議論が中心になるカリキュラムを組み立てた。学習内容の後半では探究型の実習に取り組みと共に、学びに向かう態度、特に学習を調整する態度を評価した。教員間での教材の共有、反転授業の導入など、評価規準を同科目内の教員間で共有している。

(4)探究活動について（本校 成川和久 教諭）

1年次「SSH探究基礎（1単位）」では探究の方法を身につけ、2年次「SSH探究（2単位）」では実際に探究活動を行い、論文にまとめる場としている。3年次「発展SSH探究（選択1単位）」では探究活動を深める場としている。

2. 協議会における議論 ～「主体性の育成と学習観・教師間の育成」(東京学芸大学名誉教授 三石初雄 先生)～

主体性を育てること、パフォーマンスの評価、そして、カリキュラムのデザイン化が今回の発表の主題である。こうした主体性の裏付けには、生徒の意思決定と専門的知識の裏付けも必要である。第1世代は「生存するために必要な学習」、第2世代は「飴と鞭的な動機づけ」、第3世代モチベーション論「人間は寄りたいたい、勉強したい、世界をより良くしたいという動機づけ」である。ピアジェの「内発的動機づけ」において、外からの刺激に対して、内発的に動くことは、人間だからこそその行動であるとされる。

宮野公樹氏によれば、人間独自の思考の過程で、自己と対象の間で「違和感」を感じることを思考の引き金となる。

齋藤教諭の提案に関して、子供の指差しにあるように、拡散的好奇心が知的好奇心に変化しうるものであるように、学習においても、くせ・慣れから脱し学びを広げることが大切である。ルーブリックにおいても、妥当性と公平性については、担当者間で共有化することも大切である。小境教諭の提案に関して、「意思決定」を学習場面で取り入れることで、自発的学習を育むことができる。データや情報から正しいものを得て、また、意見交換を行うことで、「自己の考えを持つこと」また「意思決定」を行うことの重要性が中学校学習指導要領に含まれている。主体性を養う教育が望まれ、医療現場、科学技術において、メリット、デメリットを示し、選択できる能力を養いたい。自分自身の遺伝情報を知るべきなのか否かも、高校生の段階で取り組みたい。意思決定は個人で行うことが基本ではあるが、他者からの助言等も大切な要因である。教師の側で、深く掘り下げた生徒のレスポンスを想定し、授業展開すべきである。

3. 課題

①ルーブリックの設定の仕方として、主体的に取り組む姿勢に「共同的な学び」「自分ごととして捉えられる」の両方向の観点を含めるべきである。論理性は思考判断のルーブリックの評価の仕方も考えたい。知識・技能・表現の割合をどのように設定すべきかも思慮すべきである。②個人的な指導について、一個人がどのように書く力が伸びたのか、評価してもいいのではないのか。③生徒がどこまで学習成果が出たら教育目標を達成できるのか、経験則が必要である。

公開研 公開授業

芸術（音楽Ⅰ）「日本歌曲を味わおう」

授業者 居城 勝彦

1. 研究主題との関わり

本校で育てたい生徒像と、本単元で育てたい「資質・能力」との関係

高等学校は音楽を選択した多くの生徒にとって学校音楽教育の最終段階である。ここを生涯教育の入り口としてとらえることが、音楽への永続的な愛好心を育む一助となると捉えている。

本校の音楽Ⅰでは、年間を通しての本質的な問いと指導目標として「音楽の諸活動を通して、生涯にわたり音楽を愛好する心情と音楽文化を尊重する態度を育てるとともに、感性を磨き、個性豊かな音楽の能力を高め、人々が永きに渡って大事にしてきた“音楽文化”について追究する。」を掲げている。

本単元では日本歌曲を題材としている。明治期以降取り入れられた西洋音楽を、日本語や文化として継承してきた音楽の要素と融合させる中で生まれたものが日本歌曲であると捉えている。そこには先人たちの音楽への試みが盛り込まれている。

指導目標を具現化するために本単元では、楽曲そのものと向き合うこと、その成立背景に意識を向けること、既習経験と関連させて理解しようとする、自分の技能を活かして音楽表現をすること、演奏者の表現を受け止め自分なりに評価すること、知り得たことを自分の音楽表現に活かすことなどを「資質・能力」として想定している。

2. 評価方法

知識・技能や思考力・判断力・表現力の育成も大事であるが、目の前に提示された日本歌曲やその演奏に対して主体的に取り組む姿こそが音楽の活動の中で最も大切にしたいものである。授業ごとに記録している音楽学習カード（Google Classroom を活用）への記述内容から、生徒が展開された活動のどこに着目し、自らの課題をどのように意識しているかを読み取り、評価して記述への返信や次時での声掛けで対応している。その中で、生徒自身の音楽の広がりやこれまでの既習経験との新たな関連に気づいている様子などが読み取れている。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜や演奏から音楽を形作っている要素及び音楽に関する用語や記号などについて、音楽における働きと関わらせて理解している。 ・楽曲の成立背景を理解している。 ・曲にふさわしい発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付け、歌唱で表している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語の歌詞と旋律や和音の響きとの関連を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて表現意図を持っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本歌曲に関心を持ち、主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

3. 単元計画（全6時間）

第一次 第1時 「小さな空」（武満徹 作詞作曲）をアナリーゼし、作者の生い立ちと合わせて理解して歌う。

第2時 「さくら横ちょう」（中田喜直作曲）をアナリーゼ、鑑賞し、歌う。

第3時 「さくら横ちょう」（別宮貞雄作曲）をアナリーゼ、鑑賞し、歌う。

第4時 「さくら横ちょう」（神戸孝夫作曲）をアナリーゼし、歌う。

第二次（本時） 声楽家による演奏を鑑賞し、感想や質問をやり取りする中で楽曲理解を深める。

自分が選んだ「さくら横ちょう」の演奏に取り組み、互いに聴き合う。

本時の展開

時間	学習の流れと生徒の活動	教師の指導と手立て
第二次 1時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の学習の流れを理解する。 歌う身体を準備しよう（20分） 	<ul style="list-style-type: none"> ・常時活動のストレッチと呼吸練習で今日の自分の身体の調子を確認させる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ストレッチと呼吸の練習をし、歌う準備をする。 ・発声練習として「小さな空」を歌う。 <p>「さくら横ちょう」の演奏を聴こう（30分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3つの「さくら横ちょう」の演奏を鑑賞する。 ・演奏者に感想や質問をし、楽曲の理解や歌唱への理解を深め、日本歌曲を味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発声練習として既習曲を発音や息の流れ、フレーズを意識しながら歌わせる。良い点を積極的に認める。 ・演奏中は授業者として生徒の様子を観察しながら、伴奏者として音楽表現することも意識する。 ・生徒と演奏者との橋渡し役を務める。その中で生徒の気づきを拾うことを心がける。
<p>第二次 2時間目</p>	<p>「さくら横ちょう」を歌おう（35分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞を活かして練習に取り組む。 ・仲間の演奏を相互評価する。・演奏を発表する ・どんな練習をしたのか、どんなアドバイスを受けたのかを意見交換する。 <p>演奏者や仲間に訊いてみよう（10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お互いの演奏を聴いた後で生まれた質問があれば、共有する。 <p>日本歌曲の魅力はなんだろう（5分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの活動を振り返り、自分にとって日本歌曲とはどのようなものかをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・曲ごとのグループに分かれて練習する。授業者と演奏者で巡回して、必要ならばアドバイスをする。 ・演奏の発表を期待するが、部分的な歌唱や練習過程で一緒に考えたことなどをクラスで共有することでもよしとする。 ・この段階だから訊いてみたいことを問える時間を設定する。演奏者から生徒への問いかけもありとする。 ・PCで学習感想を記入し送信させる。 ・わからないことやもっと知りたいことなど、自分と日本歌曲の距離を確かめる記述を求めたい。

4. 評価の実際 評価基準（ルーブリック）

	4	3	2	1
<p>知識・技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽譜や演奏から音楽を形作っている要素及び音楽に関する用語や記号などについて、音楽における働きと関わらせて理解している。 	<p>楽譜の用語や記号に着目し、音楽的要素を意識して表現に結びつけ、曲どうしを比較している。</p>	<p>楽譜の用語や記号に着目し、音楽的要素を意識して表現に結びつけようとしている。</p>	<p>楽譜の用語や記号に着目し、音楽的要素を意識しようとしている。</p>	<p>楽譜の用語や記号に着目している。</p>
<p>知識・技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽曲の成立背景を理解している。 	<p>成立背景を意識しようとして、提示された資料や自分で調べた資料を活用して曲どうしを比較している。</p>	<p>成立背景を意識しようとして、提示された資料を活用して曲どうしを比較している。</p>	<p>成立背景を意識しようとして、提示された資料を活用している。</p>	<p>成立背景を意識しようとしている。</p>
<p>知識・技能 曲にふさわしい発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付け、歌唱で表している。</p>	<p>言葉の発音とより豊かな発声でフレーズを意識した表現をしている。</p>	<p>言葉の発音とより豊かな発声を意識している。</p>	<p>言葉の発音と発声を意識している。</p>	<p>言葉の発音を意識している。</p>
<p>思考・判断・表現 日本語の歌詞と旋律や和音の響きとの関連を知覚し、それらの働きを感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて表現意図を持っている。</p>	<p>歌詞を意識して旋律や和音の響きを感じながら、フレーズのつながりがわかるように歌唱している。</p>	<p>歌詞を意識して旋律や和音の響きを感じながら、フレーズがわかるように歌唱している。</p>	<p>歌詞を意識して和音の響きを感じながら、旋律を歌唱している。</p>	<p>歌詞を意識して旋律を歌唱している。</p>
<p>主体的に学習に取り組む態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本歌曲に関心を持ち、主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。 	<p>主体的・協働的に仲間とともに教材曲に取り組む中で、日本歌曲をより深く理解しようとしている。</p>	<p>教材曲に関心を持ち、主体的・協働的に仲間とともに教材曲に取り組んでいる。</p>	<p>教材曲に関心を持ち、主体的に仲間とともに教材曲に取り組んでいる。</p>	<p>教材曲に関心を持っている。</p>

5. 主な参考文献および資料

- ・文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター「「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校 芸術（音楽）」2021年8月
- ・加藤周一「羊の歌 一わが回想一」岩波新書 1968年
- ・「神戸孝夫歌曲集 増補改訂版 さくら横ちょう」カワイ出版 2022年
- ・黒沢弘光「日本名歌曲百選 詩の分析と解釈」畑中良輔監修 塚田佳男選曲・構成 音楽之友社 1998年

研究協議会

芸術（音楽Ⅰ）「音楽文化として日本歌曲を取り上げる際の教材化の視点」

提案者 居城 勝彦

助言講師 石崎 秀和

1. 本校からの提案

高等学校芸術科音楽では小・中学校の音楽科に引き続き、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育てようとしている。音楽の授業で取り上げる楽曲（教材）は、必ず成立背景を持っている。それは一朝一夕に出来上がったものばかりではなく、人々が永きにわたって培ってきた音楽文化を背景としている場合が多い。

日本歌曲も、明治期以降盛んとなったいわゆる西洋音楽の様式の中に、日本語の歌詞の持つ抑揚やリズムを取り入れて創られ続けている音楽文化である。多くの作曲家が日本語と西洋音楽の様式との融合を図り、作品を残してきた。その中には中学校や高等学校の教科書に掲載され、歌唱され続けている曲もある。

また、多くの生徒たちは小・中学校で日本語の合唱曲に触れている。日本語の歌唱経験は積んでいるが、合唱曲として仕上げる活動に重点が置かれ、日本語の響きや成立背景に着目した楽曲の解釈を活動として取り入れることは機会として少ないだろう。そこで今回は後者を意識しながら活動を展開したい。

2. 協議会における議論

多くの点で意見交換をすることができたが、ここでは3点についてまとめる。

授業後半で全生徒が3つの「さくら横ちょう」のいずれかの演奏に参加し発表をしていた。どの曲も易しい曲ではないが、人前で演奏できるのはなぜかという質問が出た。これは他教科の授業でもプレゼンの機会が多いため、演奏することにも特別躊躇することなく取り組んでいるのだろうと考えられる。また、音楽の授業でも“前に出て発表する”という意識を持たないように、斉唱や合唱の活動でも音楽室の中央に向かって円型になって歌うことやそれぞれの位置で意見や演奏をさせることが多いことも功を奏しているのだろう。さらに、互いを聴く姿勢が小中学校での経験の中で育てていることもあるだろう。高等学校での活動はこれまでの積み重ねの中で成立していることを感じる点であった。

3つの曲とも、楽譜の提示→楽譜からの読み取り（アナリーゼ）→歌唱練習という過程でレパートリーとしていった。楽曲のイメージは感じ取るもので、楽譜から読み取るものではないのではないかという意見がでた。確かに一理あるが、楽譜に詰まった音楽情報を各自の音楽経験に基づいて読み取り、それらを共有化してから演奏することで、楽譜という音楽文化の価値に気づかせたいという意図があった。音楽活動の中で扱う楽曲やモノの中には、先人たちの叡智が込められていることに気づかせたかった。

今回教材とした「さくら横ちょう」は加藤周一の詩に作曲されている。詩の読み取りは国語で、歌唱表現については音楽でという教科横断的な展開が可能である。しかし、国語でマチネポエティックの詩の解釈について扱われる様子は現在のところない。歌唱表現に必要な程度の詩の解釈は音楽で行い、それを歌唱表現に活かす、あるいは国語の詩の学習の際に転移することを考える方が、生徒の中では自然なつながりになるだろうと考えられる。

3. 課題

課題として次の2点が挙げられる。

1点目は、教材選択である。今回は3つの「さくら横ちょう」を取り上げ、演奏し比較することとした。比較対象が2つだと優劣や嗜好についてになりやすい。今回は3つの比較でその点を回避している。同じような比較方法が可能な楽曲を探し、学習者の実態によりあった教材曲群を選択できるようにすることが日本歌曲の理解につながるだろう。

2点目は、演奏者としての教師の役割である。本単元では範唱・伴奏・歌唱技術の指導が、生徒と対面している際の教師の音楽的な役割である。生徒にとって有効な映像資料や音源はあるが、生徒の学習場面に応じた範唱・伴奏・歌唱技術の指導ができることは、生徒にとって学習活動を有意義にするためには欠かせない。そのために、教師自身が演奏面での音楽的修養に継続的に取り組むことが必要である。

公開研 公開授業◎

芸術（工芸Ⅰ）「人々の生活を心豊かに演出しよう ～キャンドルスタンドの制作～」

授業者 神田 春菜

1. 研究主題との関わり

本校の工芸では、本質的な問いとして「心豊かな生き方を創造するにはどのような工夫が必要だろうか?」と掲げ、「生涯に渡り心豊かな生き方を創造していけるよう、形、色、素材や光、イメージなどの造形的要素に着目し、身の回りの生活環境や社会をよりよく改善する工夫、工芸の伝統や文化の理解、自己や社会と工芸の関わりについて、工芸の表現の活動と鑑賞の活動を通して考える」ことに重点を置いている。

多くの生徒はものづくりが好きであり、素材や技法に対して興味を示し、完成作品を使用する姿をイメージしながら熱心に制作に取り組んでいる。一方で、社会的な視点から考えることについては、あまり具体的なイメージを描かず、漠然と「誰もが使いやすいもの」を目指して制作する傾向にある。そのため、具体的なイメージを持ち、主体的に「社会的な視点に立って」取り組む姿勢の指導と評価について課題があった。本公開授業では、社会的な視点で工芸作品などを鑑賞し、そこで気付いた見方や感じ方を自分たちの制作場面に生かせるよう、制作目標を立てる活動に取り組ませた。具体的なイメージを思い描きながら「社会的な視点に立って」取り組む姿勢を育むことを目指した。

2. 評価方法 ～パフォーマンス課題の設定～

工芸の授業では、鑑賞と発想や構想の場面で使用するワークシート、図面、作品、作品の相互鑑賞シート、Googleスライドを用いたポートフォリオ（毎授業の振り返り及び全体の振り返りレポート）の5つを評価物としている。特に本題材においては「社会的な視点」に立っているかを重視して評価していく。

「知識・技能」では、作品（途中経過も含む）とワークシートによって評価を行う。社会的な視点に立ち、造形要素の特徴や全体のイメージから捉えられているかを、ワークシートの記述やスケッチなどから読み取るとともに、作品を通して、創造的に表すことができたかを見取る。「思考・判断・表現」では、表現に関わる「発想や構想の能力」と鑑賞に関わる「鑑賞の能力」について評価を行う。「発想や構想の能力」は、課題の主旨を踏まえ、社会的な視点に立って発想し構想することができているかを、ワークシートと図面から見取る。「鑑賞の能力」は、自分の感じたこととその根拠を説明できているかを、ワークシートと相互鑑賞シートから読み取る。「主体的に学びに向かう態度」では、学習のねらいに沿って粘り強く取り組むとともに、自己の学習を調整しよりよいものを目指しているかを見取るため、ポートフォリオの振り返りの記述と取り組みの様子を照らし合わせて評価を行う。また、この題材では、社会的な視点に立って取り組もうとしているかが重要となるため、それぞれが制作目標を立てて、学習に取り組めたかも重視する。

3. 題材の指導計画

次	学習のねらい	主な学習活動
1 4時間	社会的な視点から工芸作品を見つめ直す	① やきものやその技法の魅力に触れる ② 社会的な視点から身近な日用品や工芸品を分析する ③ 作品に求められる条件と制作の目標を考える
2 8時間	人々の生活を心豊かに演出するキャンドルスタンドを発想し構想する	① 使う人や使う場面を考えアイデアを出す ② 作品に求められる機能や造形を考え構想する ③ 作品や三面図を作成して制作の計画を立てる
3 8時間	各自の計画に基づいて制作する	① 目標の確認と振り返りによるフィードバックを繰り返しながら作品を制作する（成形→乾燥→素焼き→施釉→本焼き）
4 2時間	お互いの作品を評価し合いながら鑑賞し、見方や感じ方を深める	① 目標に基づいて作品を制作することができたか実際に使用しながら評価し合う ② 工芸と社会の関わりについて自分の考えをまとめる

研究協議会

教科（美術工芸）「観点別学習状況の評価の課題

～主体的に学習に取り組む態度に着目して～

提案者 神田 春菜

助言講師 尾澤 勇

1. 本校からの提案

主体的に学習に取り組む態度の評価が、粘り強く取り組む姿勢と自己調整する力に着目されていることを踏まえ、振り返りの活動を通して指導と評価の一体化を図ることが重要であると言える。今年度からは、振り返りの方法として Google スライドを用いたポートフォリオを取り入れた。1つのファイルに年間の記録をまとめることにより、生徒の1年間の変容をより見取りやすくなり、生徒の振り返りを確認しながらの指導や、作品やワークシートと照らし合わせながらの評価が一層行いやすくなった。一方で、振り返りだけでは、その授業に対して生徒一人一人がどのような目的意識を持った上での振り返りなのが見えにくい。そのため、本公開授業では、社会的な視点に立ち、主体的に学習に取り組むための指導と評価工夫として、身の回りにある日用品や工芸品の鑑賞を通して、使い手の使い心地や使い勝手に関わる造形要素を分析することと、分析したことを踏まえ、生徒自身のこれからの制作目標を立てる学習を取り入れることで、改善を試みた。

2. 協議会における議論

研究授業に対する質疑応答及び、観点別評価の実際と今後の改善点について共有することで、指導と評価の一体化について議論を行った。

研究授業に対する質疑応答では、提示する教具や造形的な美しさへの気付きなどについて話題が上がった。その中の1つに、キャンドルスタンドごとに異なる、光の美しさや、不安定な見た目のもので美しさと機能のバランスへの気付きが出ないことへの指摘があった。鑑賞の活動において、どんな方向性で見方や感じ方を深めるかを明確にすることと、見方や感じ方を深めるためには年間のカリキュラムの中で継続的に問いかける必要があることを、改めて認識することとなった。

観点別評価の実際と今後の改善点においては、各学校の先生の実践や悩みを共有した。その一部を記載する。

- ・指導計画における作品制作とアイデア出しの時間配分が異なる中で、観点別評価の重み付けのバランスが難しい。また、どの観点をどの部分で評価するのか割り振りやバランスが難しい。
- ・鑑賞の活動では、皆が真面目に取り組むため変化が出ず、作品以外の部分が皆同じような評価となってしまう。
- ・(芸術科では)科目ごとにゴール設定が異なるので、評価のすり合わせに課題がある。
- ・リフレクションシートや振り返りシートを書かせる活動は多くの学校で取り入れられている。一方で、助言がマンネリ化したり、毎週確認をする余裕がなかったりする。言語化ができない生徒もいるなど、課題も多い。

ここまでの話を受け、助言講師からは、美術や工芸における発想や構想の重要性と、生徒一人一人の価値意識を高めることの大切さについて助言があった。

- ・芸術科目はそれぞれ特性が異なり一律には合わせられない。美術も工芸も主題生成の部分（工芸では自己への思いと他者への願い）が最も大切である。主体的な学びも発想や構想からスタートする。試行錯誤しながら、自分の作りたいもの、あるいは、他者のことを考えて作ることが大事であり、特に、導入部を工夫する必要がある。評価は叱咤激励するために必要なものである。ポートフォリオなども生徒自身がどんな力が身に付いたかを実感できることが大切である。
- ・評価を提示することで特定の価値観を教え込む形になってはならない。一人一人の価値意識を高めてあげることが大切である。生徒たちが何を持って価値意識を持つのか、多様な価値意識や価値観の違いは実感を伴うことでわかるものである。実際に持ってみたり、触ってみたりするなどして素材に触れ、試行錯誤することで自ら獲得していくものである。そのためにも、中学校のうちに工芸体験をさせてあげることも必要である。また、鑑賞にも鑑賞の技術があるのではないかと学習指導要領の改訂時に話題が上がった。次期改定ではその部分にも触れられる可能性は十分にある。

3. 課題

1年間を通して生徒がどのように変容したか、その実際を今後検証し発表していくことで、ポートフォリオなどをより指導に有効活用していけるよう、研究を進めていく。また、鑑賞の活動では工芸の見方や感じ方を深めるための指導の工夫に課題が残った。さらに、本校ではB鑑賞のイの内容にほとんど触れられていないため、その内容にも触れていきたい。

公開研 公開授業◎

芸術科（書道）「米芾の書風を捉えよう」

授業者 荒井 一浩

1. 研究主題との関わり

従前、「知識・理解」と「技能」は各々別の観点として評価が行われていた。ところが今次、「知識・技能」として理解を伴った知識と技能（書表現の技能）が一体化されたことで、「知識」と「技能」の関係が改めて問われることとなった。高等学校学習指導要領から、書道Ⅰの2内容の表現分野における漢字の書の「知識」と「技能」に関わる部分を見てみよう。

(2) 漢字の書

漢字の書に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

イ 次の(ア)及び(イ)について理解すること。

(ア) 用具・用材の特徴と表現効果との関わり

(イ) 書体や書風と用筆・運筆との関わり

ウ 次の(ア)及び(イ)の技能を身に付けること。

(ア) 古典に基づく基本的な用筆・運筆

(イ) 古典の線質、字形や構成を生かした表現

両者を比較してみると、当然のことながら密接に関連していることが読み取れる。「表現」「用筆・運筆」の用語は共通して見られるし、イの「書体や書風」とウの「古典の線質、字形や構成」も重なる部分が多い。しかし、例えば「知識」として毛筆の運用の仕方が分かったからといってそれがそのまま表現活動に反映できるとは限らない。実技を中心として体験的に学ぶ芸術科書道にとって、分かることや理解することと書表現が可能となることには大きな開きが見られることがままある。さらに、本校を例にとれば教科の中で全く定期考査が行われていないのは芸術科だけである。もちろんこれには教科の特質としてペーパーテストが馴染まないということもあるが、定期考査で見取ることがない「知識」をいかに日常の学習活動の中で見取ることができるのか、その「知識」は構想から製作過程、そして学習成果としての作品に至る過程で育まれる「技能」とどのように関連付くのかを考えることは喫緊の課題と言って良いだろう。（荒井）

2. 評価方法 ～ パフォーマンス課題の設定 ～

2-1 「知識・技能」について

「知識」の評価は、本公開授業で行なった「蜀素帖」の書風を捉えて作成したキャプションと学習成果としての作品の鑑賞文とで行う。表現領域においては(2) 漢字の書のイの(イ)書体や書風と用筆・運筆との関わりが、鑑賞領域においては(1)鑑賞のイの(ア)線質、字形、構成等の要素と表現効果や風趣との関わり(イ)日本及び中国等の文字と書の伝統と文化が評価の観点となる。さらに、〔共通事項〕に示されるア及びイの指導事項についても配慮して評価規準を設定した。

「技能」の評価は、「蜀素帖」の書風を捉えて制作した学習成果としての作品によって行う。表現領域における(2)漢字の書のウの(ア)古典に基づく基本的な用筆・運筆(イ)古典の線質、字形や構成を生かした表現が評価の観点となる。

2-2 「思考・判断・表現」について

「思考・判断・表現」の評価は、ワークシートにおける記述で行う。書風を読み取り分析を行った記述と中途における半紙作品から画仙紙の作品に進む過程での記述から見取る。(2)漢字の書のア(ア)古典の書体や書風に即した用筆・運筆、字形、全体の構成(イ)意図に基づいた表現が評価の観点となる。

2-3 「主体的に学習に取り組む態度」について

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、グループ活動における取り組み、ワークシートにおける記述及び鑑賞文で行う。表現における主体的に取り組む態度は、書風を捉えるために行なったグループでの活動状況の観察、ワークシートに記録された作品制作に当たっての見通しと振り返りから見取る。鑑賞における主体的に取り組む態度は、鑑賞文の記述の中から自身の作品と他者の作品を客観的な視点を有しての読み取りが行われているか否かで見取る。（荒井）

3. 単元計画

本単元は全10時間で設定した。

- 1・2時 「蜀素帖」の図版を鑑賞し、字形と筆圧に注目し、「青松」を書く。
- 3・4時 「蜀素帖」の書風を捉え、キャプションを作成する。(本時)
- 5・6時 「蜀素帖」から二文字を集字し、作品制作の草稿を練り、試し書きを行う。
- 7・8時 「蜀素帖」を用いた倣書作品を画仙紙半切2分の一を用いて制作し、落款を入れる。
- 9・10時 作品を互いに鑑賞した後、自作の振り返りと他者作品の鑑賞文を作成する。

単元の目標は以下のように設定している。

北宋の四大家の一人である米芾の書を学ぶ活動を通して、書に関する見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の文字や書、書の伝統と文化と幅広く関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1)北宋の四大家の一人である米芾の持つ行書の表現性について理解するとともに、晋唐の書に立脚した書表現を効果的に表現するための基礎的な技能を身に付けるようにする。
- (2)米芾の書のよさや美しさを感じ、意図に基づいて構想し表現を工夫したり、作品や書の伝統と文化の意味や価値を考え、書的美を味わい捉えたりすることができるようにする。
- (3)主体的に米芾の書の書風を活かした活動に取り組み、生涯にわたり書を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、書の伝統と文化に親しみ、書を通して心豊かな生活や社会を創造していく態度を養う。(荒井)

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

本単元を通して、生徒の古典を観察する力は大きく伸びたのではないかと感じている。臨書という行為を通して書の持つ良さに迫ろうとするのは芸術科書道という科目の持つ特質の一つだろう。しかし、えてして字形にのみ目が向き、その字形も活字に近接していく傾向が見られる。そこで、本単元では前半部分で鑑賞活動を時間的にも多く、多角的に取り入れることで鑑賞の目を養い、それを表現に生かしていくことを考えた。特に、公開授業で行なった「蜀素帖」のキャプション制作に書風の観点を取り入れたことで多くの気付きを得られたのではないかと思う。作品名、書者、時代、収蔵、内容といった基本的事項と書き振りの特徴である書風を組み合わせてのキャプション制作は、両者を結びつけることに成功した。また、個人ではなかなか気付きにくい書風をグループ活動で抽出し、さらに全体で共有を図るという過程を経ることで視野を広げていくという体験を得ることができた。そして、自身の考えとしてまとめるだけでなく、キャプションという他者に向けて分かりやすく伝えるという要素が加味されたことで、より客観性を持つての取り組みとなったのではなかろうか。

表現活動では「蜀素帖」から二文字を集字し、半切二分の一に作品として書くことを終着点としたので倣書ではあるが、創作への足がかりを得ることができたのではないかと考えている。

また、博学連携という視点からすればまだ今後に残された課題は多いと言わざるを得ない。相互交流と考えれば、生徒が実際に美術館や博物館に出向き、作品を鑑賞するとともに実際のキャプションに触れる機会も持たせたい。これからは、オンラインを活用しての交流も視野に入ることが考えられるだろう。(荒井)

本単元を通して、生徒の美術館や学芸員に対する親近感は確実に増したであろう。短時間ではあったが、作品に対する好奇心を持ち、知識を咀嚼し、鑑賞するという一連の作業を経験したことになる。今後は、この意識を持続すること、さらに今回身につけた鑑賞の能力を他の場面に応用して生かしていくことが求められよう。ものを見聞きして考え味わうプロセスは、ひとり視覚芸術のみならず音楽や演劇、文学作品など多彩なジャンルに援用されることが可能になる。

また、今回は他の生徒のキャプションの完成品を相互に閲覧する時間が十分に確保されなかった点が惜しまれた。キャプションの作成は、作品を他者に紹介するという視点が前提になる。そのためには、作品を理解するためにはどのような情報が必要かを考え判断することが必要になる。限定された文字数のなかに生徒それぞれの個性が表れてくるが、それらをじっくり読むことで自分とは異なる視点や感じ方、文章表現を知ることができ、また、鑑賞能力を深めることにつながったであろう。(徳泉)

5. 引用文献

文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』

文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校 芸術（書道）』（2021）

研究協議会

芸術科（書道）「博学連携と観点別学習状況の評価」

提案者 荒井 一浩

助言講師 徳泉 さち

1. 本校からの提案

美術館や博物館には、資料収集、保存修復、調査研究、展示等多くの社会的役割があるが、近年注目されているのは教育普及の分野ではないだろうか。例えば、東京国立博物館のホームページを閲覧すると「教育」を紹介するページには「スクールプログラム」「一般向けプログラム」「ファミリー・子供向けプログラム」「学校の先生方へ」「ボランティア活動」「インターシップ」「キャンパスメンバーズ」「アウトリーチプログラム」といったページが用意され、活動の様子の紹介や参加の案内が供されている。展示を鑑賞しながら取り組めるワークシートやぬり絵、ワークショップも紹介されている。

今回協力いただいた五島美術館でも、「美の友会」「茶の友会」という二つの友の会を設置し、月例美術講座、茶会等を催している。また、展覧会カタログや名品図録を発行し、関連する大東急記念文庫では研究者を対象として古典籍の閲覧や學術書の発行を行っているようである。こうした環境の中、学校から社会教育施設としての美術館へのアプローチは決して多いとは言えないのではなかろうか。そこで今後の公開教育研究大会では同じ世田谷区内にある五島美術館の書を専門とする学芸員に協力いただき連携の一つのスタイルを模索した。さらに、観点別学習状況の評価に目を向ければ、「知識」と「芸術表現のための技能」との関連や学習過程において「思考・判断・表現」を充実させる方策、「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法等課題が散見される。公開授業を土台に議論を深めることを企図した。（荒井）

2. 協議会における議論

参加者より今次の授業では、現職の学芸員がゲストスピーカーとして自身の体験を生徒に話すという時間が極めて重要であったとの指摘がなされた。高校生にはあまり馴染みのない職業である学芸員という仕事の実情を聞くことで、博物館や美術館がどのように運営されているかを知り、美術品や文化財に対する興味関心を引き出すきっかけを提示できたとの意見もあった。博物館や美術館の来訪者はリピーターが極めて多く、とくに年少時の体験が成人以降に強く影響をする。実際に、協議会に参加した生徒のひとりから、今回の授業のなかで学芸員より展示の作業やキャプション作成の意図や苦労話を生の声として聞き、キャプションを書くという作業を追体験することにより、展示品や展覧会そのもの、そして美術館への興味が高まったとの発言があった。学習指導要領に示される「生涯にわたって書を愛好する心情」を育むという生涯学習の見地からも、このような取り組みは極めて有効であることが協議された。

授業中盤に設定されたグループワークでは生徒間の活発な議論が展開され、各自の書の見方や感じ方を話し合う協働の時間となり、今回のハイライトであった。事前にレクチャーされた「知識・技能」に基づき、各生徒が「思考・判断・表現」して能動的に取り組む様子は、参加者一同に強い印象を与えた。書道の授業では教科の特性上、個々人の技能習得に偏重しがちであり、従来では、評価の観点も出来上がった作品の巧拙のみで判定が下されることが多々あった。今回の授業は、筆を持つ実技の時間のない画期的な取り組みであった点が特筆される。意見交換の時間や、生徒自身がキャプションに含むべきコンテンツを取捨選択しながら適切な字数にまとめ上げるという作業を挟み込んだことにより、その成果物や取り組みのプロセスが観点別評価を測る指標となるであろうと議論された。（徳泉）

3. 課題

博学連携の重要性が叫ばれて久しい。しかしながら単発的、イベント的に終わってしまう事例も数多く見聞きしてきた。今回の授業での取り組みのように同じ世田谷区内の美術館との協力体制が継続的になされることは、地域連携や生涯学習のモデルケースとなるであろう。書道では「鑑賞」の時間が学習指導要領に設定されている。来館者に対して作品をどのように伝え、鑑賞の場を設けるのかという教育普及プログラムは、博物館、美術館の学芸員にとっても模索中の今日的な課題である。本時の授業では学芸員が来校するスタイルであったが、今後は逆に生徒が美術館に訪れ、実際の作品を鑑賞し各自の学びに繋げていくことが非常に期待される。芸術科目全般に通用することであろうが、現在は授業で扱う古典作品もインターネット上で容易にヴィジュアル情報が入手できる。そのような風潮にあって、実物を守り伝える人々、場所があることを伝え、実物の持つ力に触れる時間を学校教育で提供することは今後ますます重要となるであろう。（徳泉）

公開研 公開授業◎

外国語（英語）「知的にチャレンジングな言語活動

～身近で複数の意見がある話題を通して～

授業者 光田 怜太郎

1. 研究主題との関わり

評価は、指導した結果生徒がどのように変容したか見取ることであり、評価を考えることは指導とその改善を考えることに他ならない。

知識・技能について、英語を運用するための内在的知識（語彙や文法について「知っている」ということではなく実際に「使える」ということ）を育み、その技能をより深く身につけることが、英語指導の目標である。本授業の中で英語を練習する場面を多く設定することにより、知識・技能の向上を目指す。

言語活動のなかで、機械的な反復学習に止まらず、複数の視点からの視点を必要とする場面を設定することで、思考・判断・表現の力の育成を狙う。

また、身近だが思考することが求められる課題を与えることにより、考えてみたくなるような仕掛けを与えるので、これが主体的に学ぶ態度につながるだろう。

これらの活動における生徒の達成度合いを見取ることが本授業における生徒に対する評価である。同時に生徒がどれほど活動に入り込めたかは、授業者自身の評価であり指導の改善につなげたい。

2. 評価方法 ～パフォーマンス課題の設定～

観点別評価を念頭に置き、評価項目を次のように設定した。

「知識・技能」においては、基本的な知識・技能の習得がなされているかどうかで評価を行う。英語の受信と発信がスムーズに行えるのであればA、平易な英語の受信と発信ができるのであればB、英語の指示が理解できず活動に取り組めないのであればCとする。

「思考・判断・表現」は、知識・技能を活用した課題を解決のための表現力であり、自分の意見を論拠を持って説明することができればA、自分の感じたことを述べるのであればB、思考・判断・表現するための知識・技能が備わってなく結果として英語での表出がきわめて乏しければCとする。

「主体的に取り組む態度」について複数の観点を設定した。「展望を立て、計画的に取り組む力」として、授業の流れを理解して取り組めればA、各場面で与えられた指示に従うことができればB、何をやる場面か理解できていなければCとする。「主体的に取り組もうとする姿勢」は、自らの意見を積極的に提示すればA、意見を尋ねられたときに答えられればB、話を聞いていないのであればCとする。「他者との関係を構築する力、協働する力」においては、班員と積極的にやりとりをすればA、班員とやりとりをしようとしていればB、班員とまじわろうとしないような態度においてはCとする。

3. 単元計画

日頃より「コミュニケーション英語」の教科書の文章等を通して長文読解には慣れており、またリテリング活動等を通して英語を用いる活動はしているが、与えられたテーマに沿って自ら考え意見を述べる活動には慣れていないと言えない。本単元では、日常生活において複数の意見が出ると思われるテーマを設定し、それについて理解し自分の意見を表出するという日頃よりも負荷の高い活動を試みる。今回は、その活動を授業に組み込むという実験であり、単発の授業となる。単発の授業を行うことに疑義を持つ人がいるかもしれないが、最終的にはこの試みを日常の授業の中に組み込んでいくことが狙いであるので、その趣旨はご理解いただきたい。

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

ここでいう評価とは、生徒を格付けするために行うのではなく、授業で活動を行っている際、教師が生徒の活動や達成具合を適切に見取るための手段である。この点において、認識がずれていると、議論が噛み合わなくなる。

格付けのための評価とは、たとえば入試である。それは、受験生を評価し、優秀な人物を選抜する行為である。入試は指導ではない。日頃の授業や学校での教育活動は、入試とは違い、指導でなくてはならない。

先にあげた3観点5項目の評価は、生徒が授業に授業者の狙い通りに取り組めているかを教師が見取るための手段である。たとえば、本授業では、思考・判断・表現の評価は、「自分の意見を論拠を持って説明すること」ができればAとしたが、これは生徒の能力を判定するものではない。そのように生徒を導いているかを、授業者が判断するためのツールである。もし、自分の意見を論拠を持って説明することができていなければ、それは教師の指示に問題があるのかもしれないとか、生徒のレディネスが不十分な状態で無理やり展開してしまったのではないかと、というような検証が必要なのである。したがって、ここでいう評価とは、授業者が自身の授業のフィードバックを得るための手段であり、評価をするために作成したルーブリックは、各生徒を見取りながら行う授業者自身の点検項目といえるだろう。

格付け型の評価を念頭に置いている人は、生徒に試験やパフォーマンス課題などのハードルを設定し、生徒が自己責任でそれに向かって努力をし、高い評価をインセンティブとして生徒に与えて頑張らせることが評価である、と考える。それは、確かにそのような一面もあるだろう。しかし、それはあくまでも一面にすぎない。この面しか捉えていないのであれば、生徒が能力を発揮できないのは、あくまでも生徒自身の責任になってしまう。

評価を格付けであると捉えた場合、何よりも大切なことは公平さと説明責任を追及する作業だということになる。行きすぎると、それは教育とはかけ離れたものになる。教育の目的は生徒の資質能力の向上であることを忘れてはならない。

しかし、評価を授業や学習活動が適切に行われているかを点検する道具だと捉えれば、見方が変わる。もし、生徒を公平に成績を付けなければならないとするならば、この授業で先に挙げた3観点5項目を40人の生徒に、授業をしながら記録しなければならない。そのようなことは土台無理である。

この授業で評価はどのように行なっているのですか、という質問や批判とも取れるコメントがあった。(あたかも、評価を記録できないような活動はすべきではないと言わんばかりであるが、これは本末転倒だろう。)この点については私は各評価項目は生徒がしっかりと授業に参加して学んでいることを観察するための視点だ、と理解している。助言講師は協議会において、スピーキングの評価はしっかり取り組んでいればA、つまづいているようであればBでよく、その程度でしかできない、とおっしゃった。これが現実的なところだろう。私が先の評価項目でCとしたものは、そもそも学習に対する態度に問題がある状態だ。日常的にスピーキングを取り入れ、日々生徒を見取ることで妥当な評価につながるのである。

評価は格付けではなく、生徒のパフォーマンスを見取るための手段だと理解すれば、いまいち授業について来られない生徒について、その生徒の能力が低いという発想にはならない。そのような生徒にどのようなアプローチが必要か、むしろ授業者側が工夫をする必要があるのである。(もちろん、得意な生徒と苦手な生徒それぞれの反応を見取することは大切である。)一方で、このような評価が全くない授業とは、教師が黒板だけを見て板書を行い、生徒の反応を一切見ない授業である。教師は「私は教えた」と主張するかもしれないが、フィードバックが何もないため、このような授業で生徒の資質・能力が効果的に伸ばせることは期待できないだろう。

もちろん、定期的に試験やパフォーマンス課題にて、生徒の能力を計測し評価を記録することも必要である。しかし、そのような場面であってもそれは格付けではなく、翌学期や次年度に向けての生徒および教師のフィードバックの材料とすべきである。

現在、高等学校で観点別評価が導入されるにあたり、評価をいかに行うかという議論が活発にされているが、格付け型の評価を行うこと自体が目的化しないよう、切に願う。

さて、今回の授業が目標を達成できたか、すなわち多くの生徒がAの状態に到達したかということ、まだ新しい授業形式の試みであったため、多くの改善点があったと反省している。たとえば、「自分の意見を論拠を持って説明すること」ができたかどうかは、私自身のスピーキング力の未熟さもあり、生徒の発話を導き出せなかった場面もあったと思う。生徒の資質・能力を最大限伸ばすためには教師の力も必要である、ということを知らされた。新しい試みのため、予期しない展開や手順のミスもあった。このため批判も多くあり、授業を見て不快に思われた方には深くお詫びをしたいと思う。だが、私自身はこの授業を行ってよかったと思う。評価との関連で言えば、この評価項目を生徒と教師が共有することで、今後の授業の進む方向性が見えてくる。今回の授業のエッセンスを日常的に授業に取り入れていきたいと思っている。評価とは、学習活動において、生徒に目標を示すものであると同時に、教師が授業が適切に進んでいるかどうかを点検するフィードバックであるということ、今回強く認識し、今後も健全な評価と授業を展開していきたい。

研究協議会

英語 「知的にチャレンジングな言語活動を展開する授業のありかた ～コミュニケーション活動に適した教材とカリキュラムを考える～」

提 案 者 光田 怜太郎
助言講師 金谷 憲

1. 本校からの提案

活発な英語活動を行うため、日常生活において複数の意見が出るとされるテーマを設定し、それについて理解し自分の意見を表出するという負荷の高い活動を提案する。

2. 協議会における議論

コミュニケーション英語でコミュニケーションを行う時間が不十分なのではないか。英語活動を活発にするために「知的にチャレンジングな活動」を考えてみた。本授業では、「郵便料金が不足しており、受け取り手は不足料金を支払ったのだが、そのことを送り手に伝えるべきか否か」というテーマである。実験的に試みた単発的な授業である。「未来の高校英語カリキュラム研究会」で提案されたプランを実践してみた。英語コミュニケーション3単位、論理表現2単位程度で現在行われていることが多いだろうが、これを「英語活動」3～4単位、「英語理解」2単位にしてみてもどうか。「英語活動」では英語を実際に使って英語の定着を図る科目、「英語理解」ではリーディングを通して英語で教養を身につける科目として考えている。

主な議論。

- ・ 「知的にチャレンジング」とはどの程度のレベルを想定しているのか。大きな社会問題（原発問題等）の賛成反対というよりも、日常に起こりうることを話題にするのがよいのではないか。いわば「旅行英会話」と「世界平和」の間にあるようなテーマ。今回の絵葉書の話は小学校の道徳のテーマである。今回の授業でもグループによって様々な意見が出た。最後に教員が中心になって生徒と共有するとよい。議論を丁寧にしつつ大量に行う。テーマが様々な角度から深掘りできる、ということが重要である。
- ・ グループ活動には工夫が必要。たとえば議論の最中にグループの半分のメンバーを変えて活性化してみる、ということもありだろうか。今回のテーマで、料金不足の絵葉書もらった人が、同じことを相手にもして「リベンジする」(do the same thing) という意見が出たが理解しがたい部分もある。もしかしたらこれは「郵便料金」というものにいまの高校生の常識がないからかもしれない。議論の「ネタ」探しは大変だ。
- ・ 提案している「英語活動」カリキュラムでは細案ではなく略案を立て、最後に教師がまとめ上げるのはどうだろうか。教師にもこういう授業の実践経験と実力がなければならないが、生徒に十分時間をかけて、英語で議論をさせることが大事なので、教師は見守って、最後に授業をまとめ上げればよいのではないか。

「観点別評価の導入に向けた評価のあり方」について。

- ・ 授業中の「英語活動」の評価については、教員がペーパー（ルーブリック）がなくても評価できるくらいでないといけない。評価の観点は1つがベストだろう。3つは無理だ。授業をやりながら、複数の観点で評価はできないだろう。
- ・ 定期考査をブラッシュアップして様々な角度から評価して振り返りができればよいのではないか。さらには点数を出した後に振り返って生徒の状況を把握し、フィードバックする機会を保障するのが大切ではないか。
- ・ 「主体性」をそもそも評価などできないのではないか。人格にかかわることでもあるのではないか。

3. 課題

英語活動はますます必要である。スピーキングの「ネタ」があればあるほど活動が広がる。ネタのストックがほしい。また英語のスピーキング活動の時間を保証するために、プリント、パソコン等をどう準備する（させる）かが課題。観点別評価も含め、評価は過去も今後も課題になる。

